

当事者による 自助マップづくり

何らかの福祉課題を抱えた時、その人（自分）を当事者と呼ぶ。だからすべての住民が、（ある時点では）当事者になる。当事者意識を持った住民の全てが、このマップ作りの主役になれる。

第1章 ご近所福祉と支え合いマップの実情

次頁のマップは、車を持たない一人暮らし高齢者がどのように買い物をしているかを調べたもの。

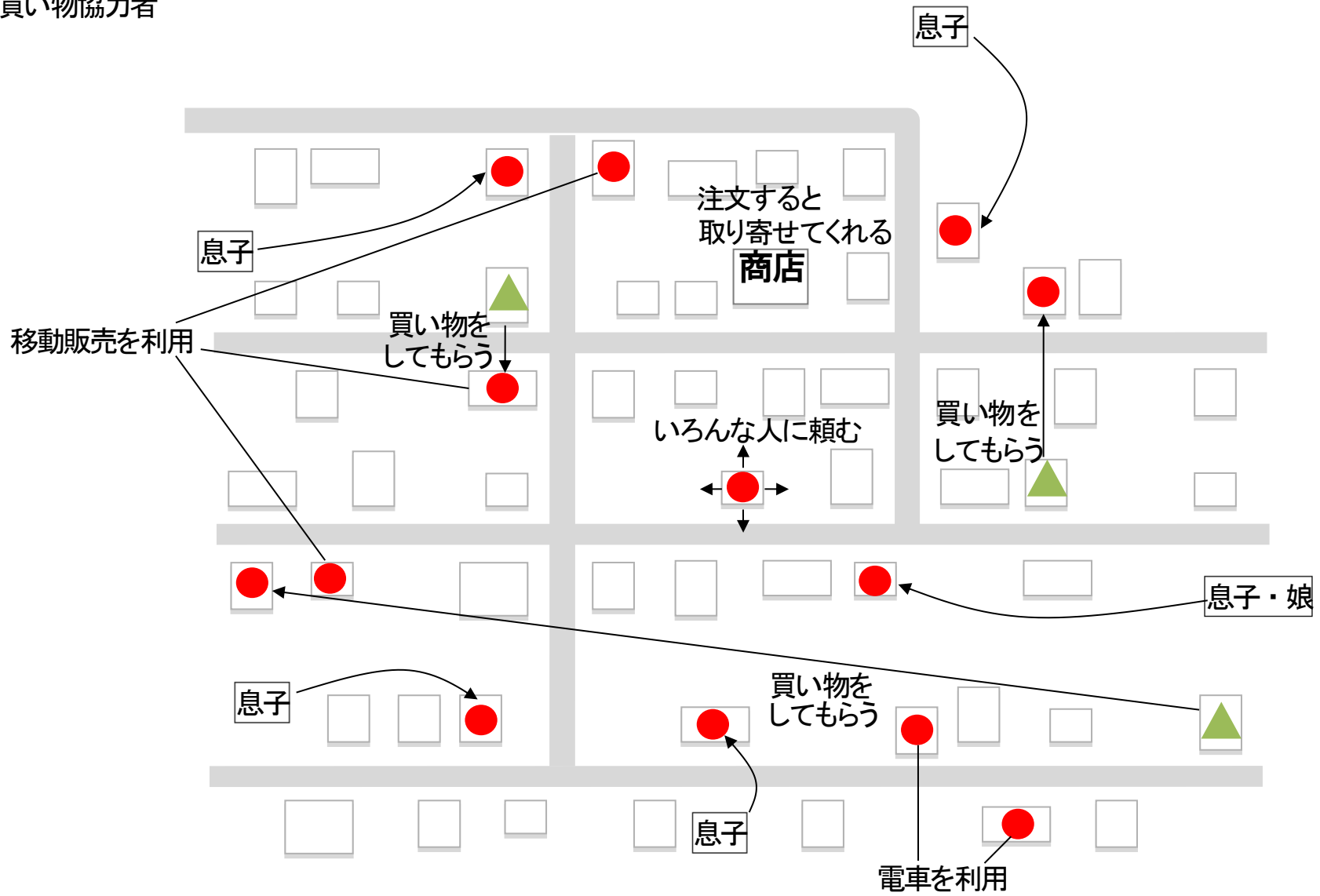
(1)「車を持たない一人暮らし高齢者」はいわゆる当事者と言っていい。何らかの福祉課題を抱えた時、その人を当事者と呼ぶ。だからすべての住民が、ある時点では「当事者」になる。介護、子育ての問題、病気など、福祉課題にはいろいろある。この定義で言うと、今までもマップ作りの場に当事者は参加していた。しかし彼らはその意識がなかった。主催者も同様だ。

(2)ご近所で実践されている福祉は、「当事者」が自分の福祉課題を解決するための行為と言っていい。むしろ「当事者」でない人が当事者の問題解決に動くこともあるが、現実にはそれは注目すべきほどではない。むしろ当事者が主体的に住民の支援を引き出すことはあるが、それも当事者の行為の一環として考えればいいことだ。

(3)今まで作られていたマップは、一般住民が要援護者にどういう支援をしているかが中心だった。ところがこのマップは、当事者が自分の困り事をどのように解決しているか、または当事者同士がどう解決し合っているか、あるいは当事者が一般住民の支援をどのように引き出しているかが表されている。当事者側の身を守る行為が中心だ。じつはこれもまた「福祉活動」と言う。福祉活動の中の、当事者側の福祉活動がマップに表現されてこなかったのだ。

● 交通(車)に不便をしている一人暮らし高齢者

▲ 買い物協力者



(4)これまではマップを作るのは一般住民で、しかも聴取の対象も一般住民、つまりマップ作りの場に当事者が参加してこなかった。しかもこのマップ作りとは別に、一般住民が個別に、または集団で、当事者に聴取することもなかった。だから、当事者がどんな問題を抱えていて、それをどのように解決しようとしているのかがわからなかった。

実質上の当事者が、その意識のないままにマップ作りに参加していたかもしれないが、その人から当事者としての考えや行動が吐露されることはあまりなかった。

(5)これからは当事者もマップ作りに加わる必要がある

実際には、ご近所では当事者が自身の問題解決を求めて、助け合いを主導している。それならマップ作りでまず把握すべきなのは、当事者たちの自助活動であるはずだ。マップ作りの現場には、まずは当事者たちが参加していなければならない。そこで当事者が彼ら同士で助け合ったり、担い手に助けを求める活動（これも福祉活動だ）を住宅地図にのせる必要がある。

私が支え合いマップを主唱し、30年かけて普及させてきたが、その間、当事者がマップ作りに参加すべきだという議論がなされなかった。当事者のことは初めからオミットしていたのだ。当事者は当然、プライバシーの主張をするだろうし、自分の事を周り人たちに打ち明けることもすまいと、初めから決めつけていた節もある。

しかしそれが難しいと言って初めから諦めてしまうのは問題だ。実際にやってみれば、マップ作りの場に当事者を引き出すのはやれないことはない。

第2章 どんなマップを作るべきか

(1)誰のことを調べるのか

ご近所で福祉活動をしているのは主に当事者であり、福祉の当事者を支えるのが支え合いの目的だとすれば、当事者に照準を当てたマップ作りをすべきである。

→当事者が自分の問題解決のための福祉活動をしているのだから、その事実を把握するのが先決となる。

→今までは一般住民を対象に、住民の助け合いの実態を把握することに力を入れてきた。

→これからはまず当事者を相手に、彼ら自身の行動実態を聴取する。何に困っているか、それをどう解決しているか。

(2)誰が誰に聴取するのかー5つの選択肢

①住民・または関係者（社会福祉協議会・民生委員、町内会など）が当事者に聴取。

②住民または関係者が当事者と一緒に作る。

③当事者が他の当事者に聴取。当事者同士で聴取し合う。

④当事者と健常者の区別なしに聴取する。

→自身が福祉問題を抱えていると認識すれば、だれでも当事者と言える。

⑤参加者全員に当事者の認識で参加してもらう方法もあり得る。

→参加者はマップ作りに加わるに際して、自分は当事者なのだという自覚になってもらう。住民の誰がどんな福祉問題を抱えてい

るかでなく、自分は今、どんな困り事を抱えていて、それをどのように解決しようとしているかを語る。互いの解決行動を出し合った上で、より効果的な解決策を導き出す。それを自分も活用する。

(3)何人を相手にするのか

①聴取する相手は、1人からでもいい。

実際には1人か2人を相手に、丁寧に聴取する。

②マップ作りで出てきた事実を他の当事者に伝えていけば、マップ作りの成果を共有できる。

(4)マップづくりの進め方

①参加者はすべて自分を当事者と意識し、マップ作りの場では、他人の事でなく、自分の事を語る。

②自分の事を語れない人ばかりでは、マップ作りはできない。

③例えば、庭木の剪定ができないという問題を提示し、そのテーマなら語れるという人でマップを作ってもいい。つまり特定のテーマに絞って、今日はこのテーマで話し合いをしますと提案してもいい。

④1つのテーマで、解決策が見つかったら、それをご近所中に伝えるようにすれば、当事者意識のなかつた人も、めざめてくる。

その結果、一人でも、困り事が解決できたといった成果が出るようにする。元々日本人は当事者意識を持ってないところがあるの

で、成果を見せることで、少しずつ開かせていくのも1つの考え方と言える。

⑤このマップ作りでは、これまでの支え合いマップと同じパターンで進める必要はない。住民を5人集めても、困り事がない人ばかりでは、話は進まない。まずは1人が声を出すことから始めたい。

⑥何でも自分の困り事を出せる人が見つければ、その人から次々と問題提起をしてもらおうという手もある。じつはここで紹介したマップは、当事者からの情報でなく、大型世話焼きさんが提供した情報である。このように当事者のことを知っている人もいるのだ。

⑦これまでは支え合いマップは社会福祉の中の「地域の実態把握」の手段として、1つの分野を確立していた。そしてマップ作りも他の事業と独立して存在していた。しかしこのあり方は、マップ作りの効力を損なっている面もある。**マップ作りはあくまで地域福祉あるいは福祉のまちづくりという営みの中の1つの手段として、その必要が出た時、効率的に活用するものの1つと位置付ける方が、本当はいいのかもしれない。**その方がプライバシーとか個人情報保護の問題も出にくいのではないか。

第3章 マップ作りの実際

1.足元に身を守る「安心エリア」をつくる

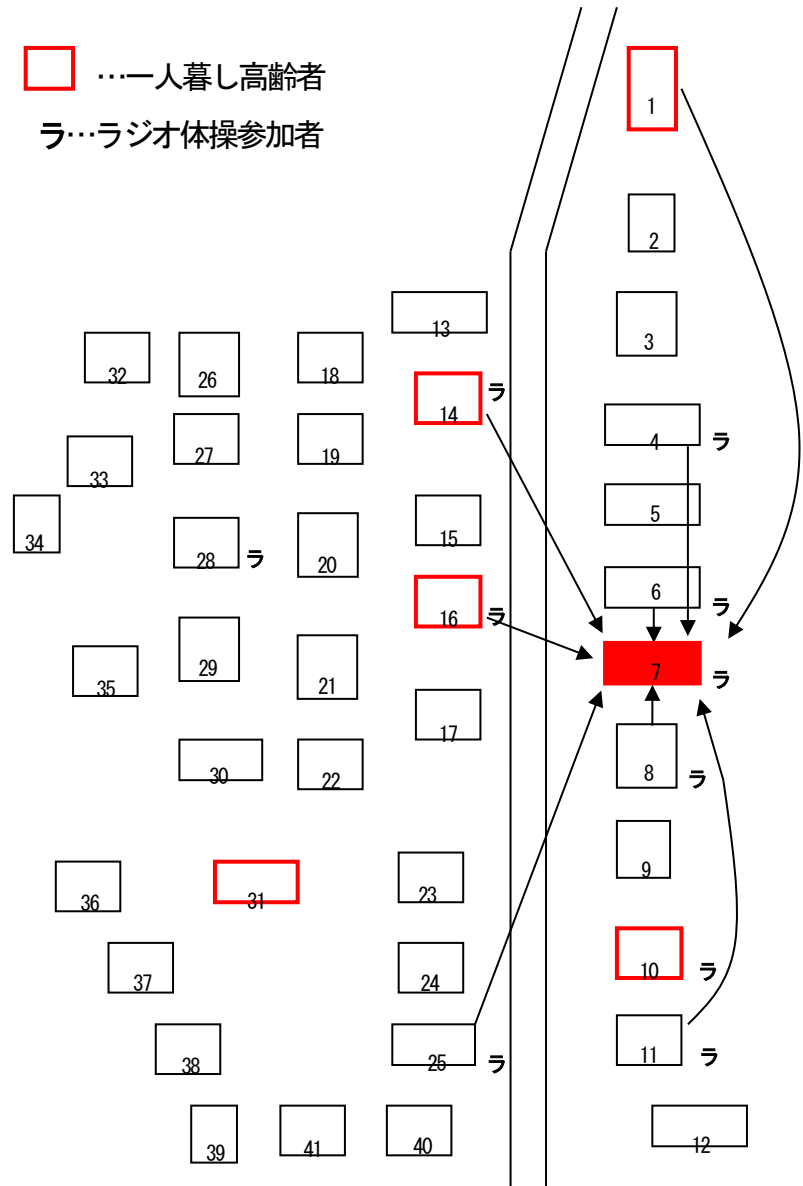
当事者にとってのマップ作りの入門編としては、この自助エリアマップが最適だ。最低限、身を守るための空間、10～20世帯程度の範囲で、自分の支援者やその候補となる人をマップに乗せる。

(1)自宅でお茶会を開く一人暮らしの女性。参加者はさりげなく見守り

次頁のマップ。右側の道路は「あいさつ通り」と言われ、出会ったら挨拶することになっているが、ここで毎日、ラジオ体操が行われている。世話焼きさんがラジオを持ち出すと、この通りの住民が自宅前に出て、一斉に体操を始める。一人暮らし高齢者が数名住んでいるが、体操への参加で安否確認ができる。

メンバーに90歳の一人暮らしの女性がいる(7番の家)。彼女の家にとくさんの線が入っている。ラジオ体操の後、彼女が「ウチに来ないかい」と誘っていた。ここで毎日のようにお茶会が開かれ、帰りには彼女の手づくりのおかずを手渡されたりする。招待された方は、さりげなく彼女の体調を観察し、困り事があれば応じてもいる。

□ …一人暮らし高齢者
ラ…ラジオ体操参加者

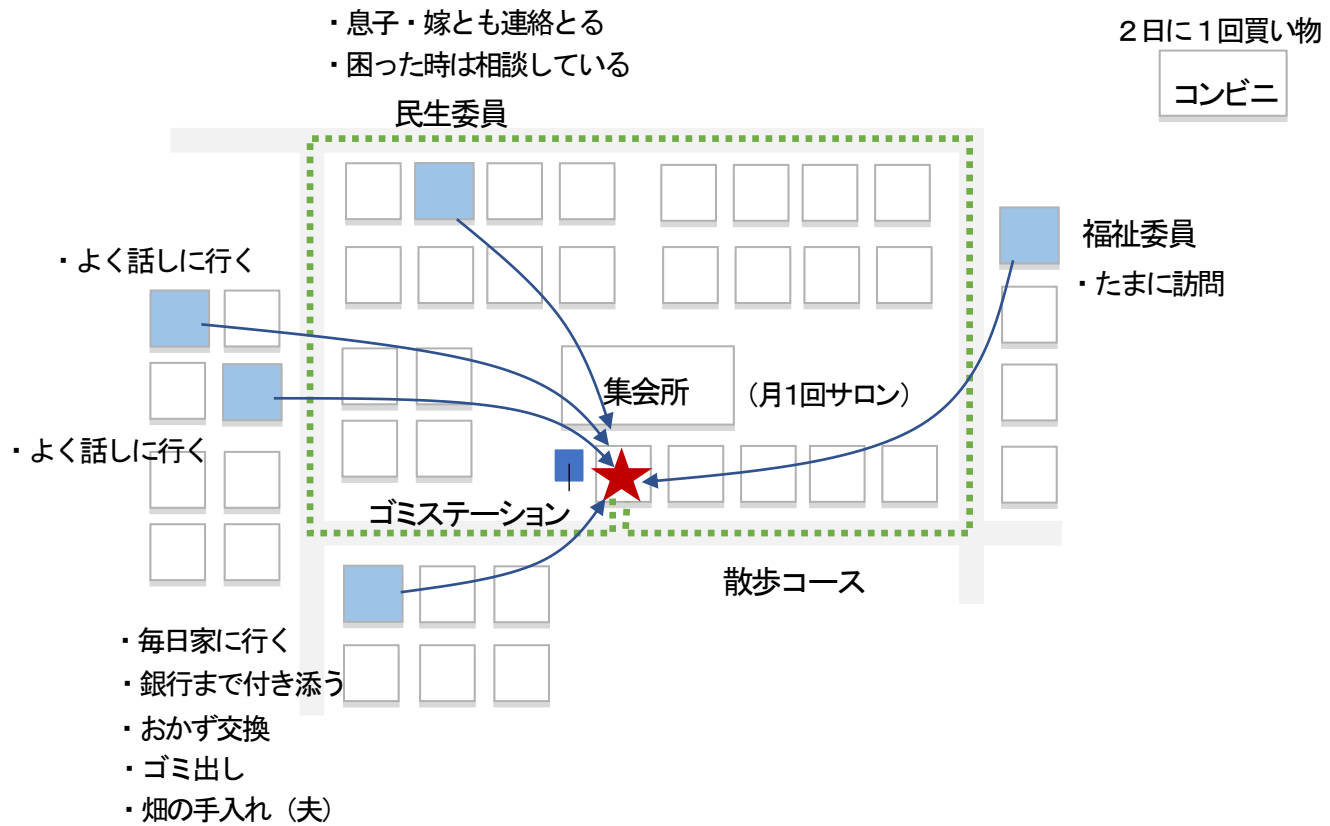


(2)「安心エリア」づくりで工夫を凝らす一人暮らし

支え合いマップ作りをしていて発見したのが「自助エリア」、またの名を「安心エリア」。一人暮らしの女性、それも超高齢になるほど、自宅に周りの人を集めてお茶飲みをしたりしている。それだけでなく、自分の周辺を、文字通りの「安心エリア」にすべく工夫を凝らすのだ。

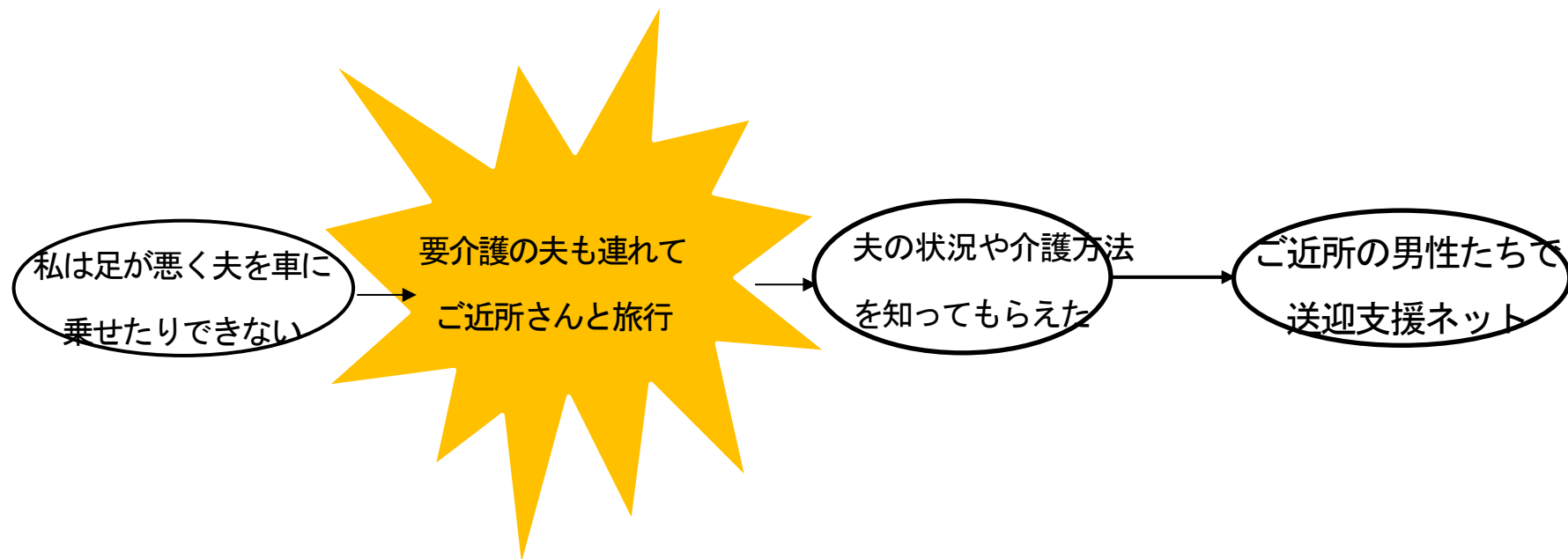
次に紹介するのは、山口県和木町の地域包括支援センターのスタッフが最近、当事者（S子さん）と一緒に作ったマップ。彼女は更新申請で要介護度が下がってサービスを減らさなければならず、包括や民生委員が関わりながら、困り事の解決にご近所の友人たちの支援を得て、自立して生活できている。

マップを見ると、自宅のすぐ横にゴミステーションがある。以前はそれが嫌だったが、「今は近くで助かる」。すぐそばに集会所もあり、そこで開かれるサロンに参加している。散歩ルートには彼女を見守ってくれる人がいるし、逆に彼女が見守っている相手（男性の一人暮らしの人）もいる。その他にも、日常的に彼女の世話をしてくれる人がいる。この全体を見て、まさに「安心エリア」だなと思われる。こういうエリアづくりが自助努力の基本と言えよう。



2.要介護の身内のための送迎ネット作り

夫が大柄で要介護なので、通院の時などに送迎するのが大変という主婦が近隣の男性4名を支援者として確保していた。その方法は以下のとおり。自分にも夫にも、ご近所さんにもフィットしたやり方だ。



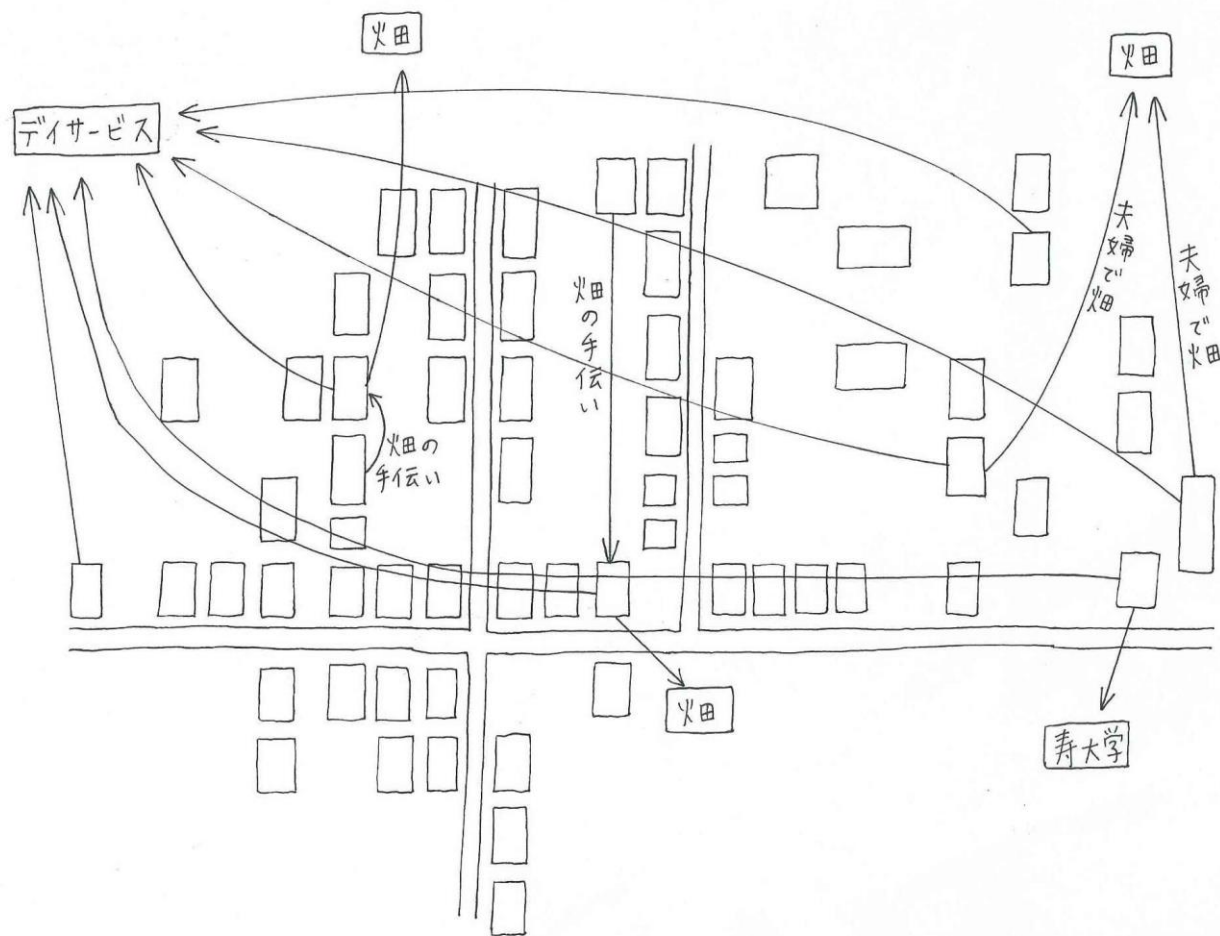
じつはご近所さんたちで旅行に行くときに要介護の夫も一緒に行き、夫の状況や介護方法などを知ってもらったという。このネットは彼女の夫だけではなく、いずれ他の人たちにとっても、役に立つはずだ。



3. デイのない日に畑作業。これもデイだった？

マップ作りで、デイサービスを利用している人は、それ以外の日に何をしているのか住民に聞いたら、畑をやっている人が多いことに気づいた。次のマップでは、7人のうちの4人が畑をやっている。無論、組織的なものというよりは、それぞれが自分の意思で耕作しているのだが、ではまったく組織的ではないかというところ、それも違う。その中間形態というところだ。阿吽の呼吸という感覚である。面白いのは、この4人の全員にサポーターが付いていて、畑仕事を手伝っていることだ。2人は身内でなく隣人だ。

まるでデイサービスセンターで活躍するボランティアという感じではないか。

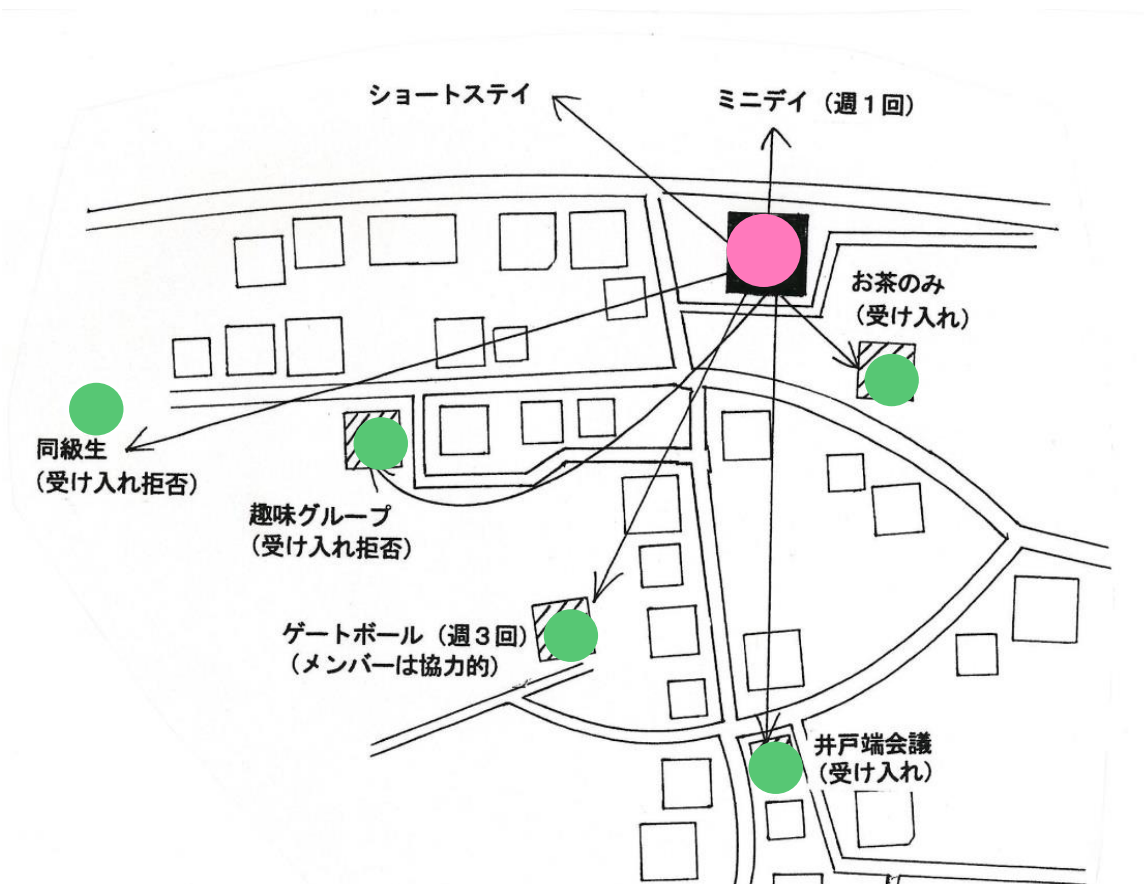


4.私にとっての豊かな福祉サービスは私が選択する

要援護者が望んでいるのは、安全の確保や困り事の解決だけではない。次のマップでは、認知症の女性が、ご近所を歩きながら、あちこちに「私も入れてちょうだい」と押しかけていた。

これに対し、昔の同窓生は「うちに来ないで」と排除していた。趣味グループも同様。一方でゲートボールのグループは彼女を受け入れていた。サロン（井戸端会議）も、「お茶飲み」のメンバーも受け入れている。

彼女は何をしたいのか。自分が選んだ場や活動に参加し、私らしい豊かな人生を送りたいということだ。そうすると「入れてあげる」のも、それだけで立派な福祉活動とすることができる。当事者の主張や願いは、言葉よりも行動によって表されるから、彼らの何気ない行動をよく読み取る必要がある。



5.要介護高齢者の家庭での住まい方をそのまま老人ホームに

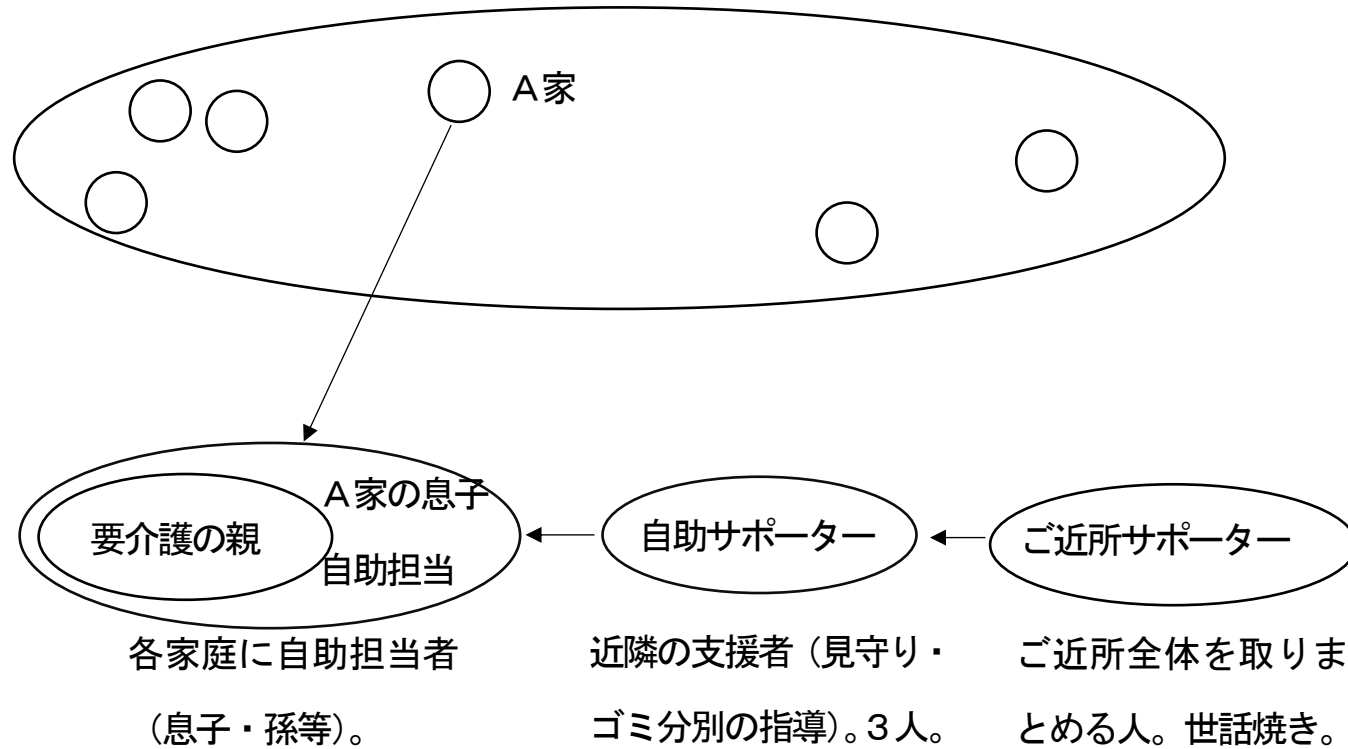
本当の福祉のあり方を探ろうとしたら、住民がやっていることを丁寧に観察して、彼らの意図していることを図式化あるいは構造化してみるといい。ここではその試みをやってみよう。

1つの集落（50世帯）に6軒の要介護者のいる家があった。大抵は息子が親の面倒を見ている。ご近所さん数名が見守っている家も。これを生かせないか。息子が各家の自助担当。近隣の数名がサポート役。その全体を世話焼きさんが取りまとめる。

この集落の実態を眺めて、彼らは一体どんな福祉をしたいと思っているのかを想像してみたら、こういう構図が出来上がった。1つ1つの家が老人ホームの居室と見ればいい。老人ホームが全部で6つある。それらが何となくつながって、つまりコテージのようになり、1つの老人ホーム群ができている。

これを素直に認めるとしたら、それぞれの「ホーム」の息子たちをホームのマネジャーとして手当を支給してもいいのではないかと考えたのだ。この息子、一般的な言い方としては、8050問題の当事者に似ている。しかし彼らは見方を変えれば、こういう老人ホーム群のマネジャーの役をやっていると見てもいいのではないか。

私たちは人の評価を周りの目からのみ見る癖がある。そうでなく、当事者本人の側からも見てあげる必要がある。一見、家でブラブラしているように見えても、自宅でそこそこの役割を果たしているとも考えられる。ハウスキーピングとか親の介護の一部



を果たしているかもしれない。ならば、それに対して正当な評価を行い、サポートをしながら、それを手当等で報いるのも1つのあり方ではないか。

図に示したように、親や自分も含めた、わが家の自助活動のマネジメントという役割もありうるのだ

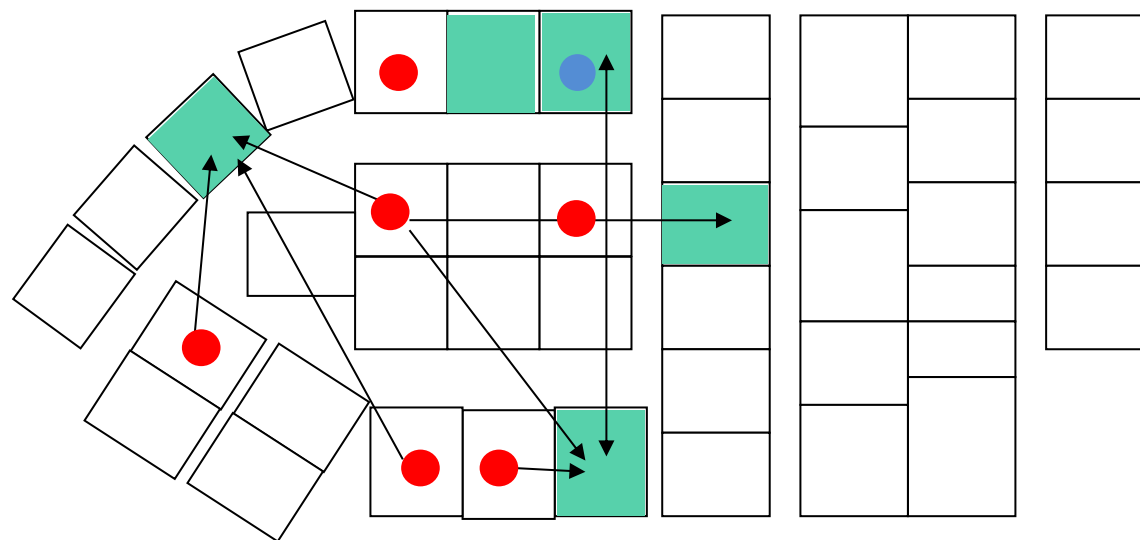
6.現役に対するOBのサポート

あるご近所で、5軒が家庭介護をしている。その家を誰かが支えていないか調べてみることにした。まず、この集落で家庭介護を経験した人がどれぐらいいるのか。この集落には6軒あった。

もしかして彼らが現役の介護者のサポートをしていないかと調べたら、やはりそうだった。例えば左端の家には3人のOBが関わっている。また、右下の家には2人のOBと1人の現役が関わっていた。

もう1つ注目すべきは、●印が付いた人だ。彼女自身も介護中であるが、元看護師としての腕を、この集落の人みんなの相談に乗ることで生かしている。この集落に事実上の診療所があると考えられるほどなのだ。そして彼女は大型世話焼きさんでもある。

興味深いことだが、他の地区でこういう介護のOBが揃った地区のことを話すと羨ましがられるが、実際に元看護師、元保健師、それに家庭介護の経験のある人の家に印をつけていくと、どの地区にもかなりの人がこれに該当することがわかり安心する。



■…介護中の家庭(線は関わる人)。介護経験者●がサポートしている。

●は元看護師。

7.息子・娘の近居・遠居ーもっと頼りになる資源に…

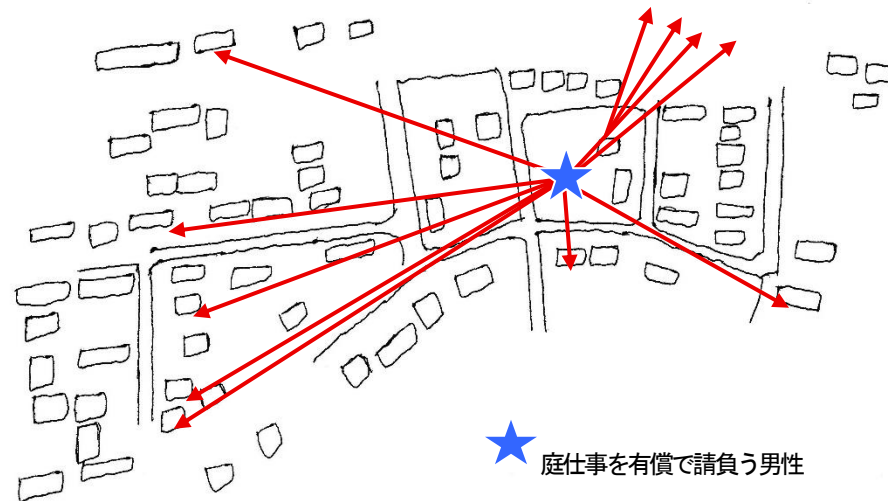
マップをつくっていると、「近居」が増えていることに気付く。このマップを見ていただきたい。息子や娘が同じご近所内の別の敷地に家を建てて、日常的に親元へ通って来ているケースが18軒見つかった。ご近所にスペースがない場合は、隣接した空き地に住居を求めている。

URが同じURに近居する場合に、子どもの方の家賃を何パーセントか低くするといったサービスもある。政府ぐるみで近居を応援する方向だが、これは住民の行動ともマッチしているのだ。



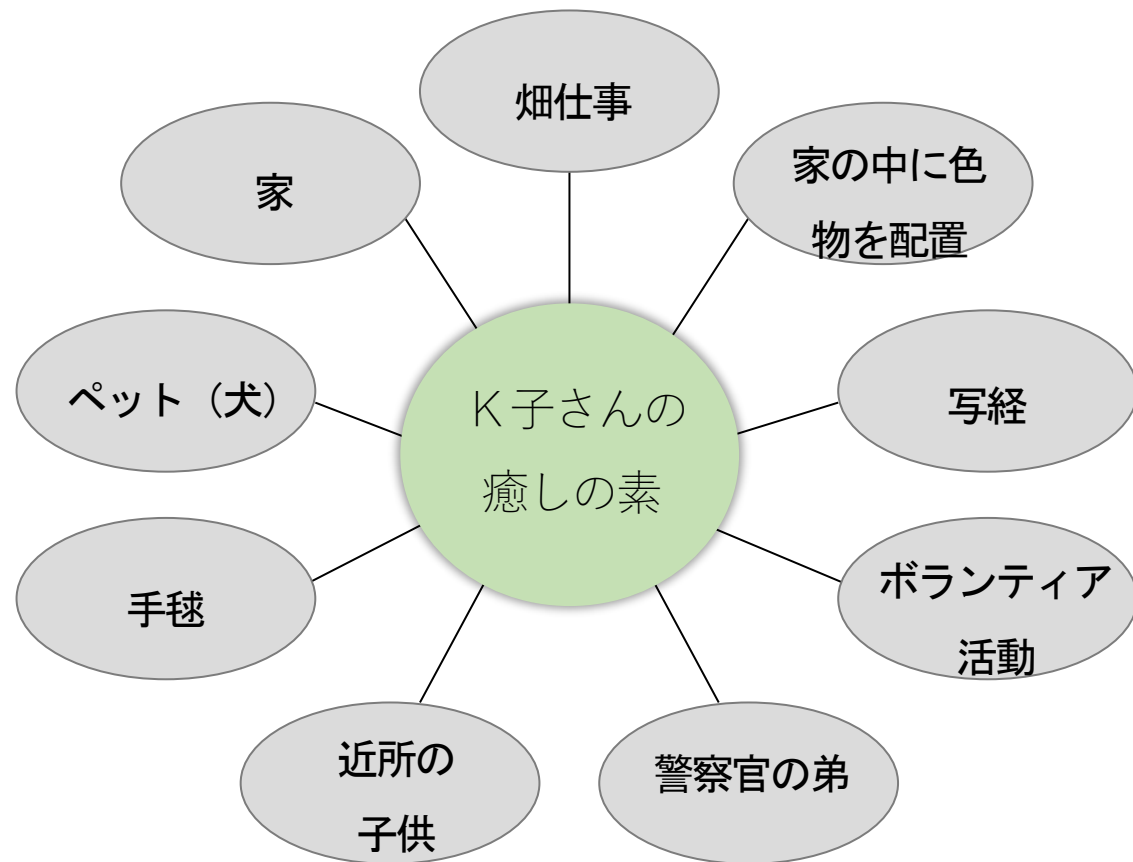
8.1 人が見つけた庭木の剪定の技術者を11人が利用

次のマップは、庭木の剪定で困っている一人暮らしの高齢女性たちが、定年退職後にこの技術を学んだ男性を、上手に活用しているというものだ。別に誰かがこの男性のことを知らせ回ったわけでもない。彼が庭木の剪定ができて、一人暮らしの女性に若干の有償でやってあげているという情報が当事者の中で広がって、それを知った人たちが「私も」「私も」と殺到したということなのだ。普通なら特定の団体がこれを情報化して、意図的に普及させるものだが、そういうことはだれも何もしていない。彼との交渉は当然、個々の当事者が行っているから、謝礼のあり方や額なども、1人ひとり全部違う。意図的で組織的な活動が全く行われていないのに、小さなご近所の中の多くがこのサービスを活用している。



9.足元に私のための「癒しの素」を配置

- ①ボランティア活動発表会で見つけたK子さん。超高齢で一人暮らしなのに5つのグループに所属していた。
- ②それに加えて、自身の周りにたくさんの癒しの素を配置していた。
- ③これも自分に対する福祉活動なのかも知れない。



10.当事者仲間と同盟を結ぶ

当事者1人ひとりの力は弱くても、同じ課題を抱えた当事者同士で協力すれば、自力解決の道も開ける。以下のように、あるご近所で実際に取り組んでもらった限りでは、この手法はたしかに使えることがわかった。

(1)ご近所同盟<当事者が共通の目標・課題を持って連携する>

あるご近所で要援護者による同盟の実験を試みた。担当してくれたのは、山口県和木町の地域包括支援センターの茅原史貴さん。2つの取り組みについて紹介しよう。

①同じ課題を抱えた2人で対策会議

同じご近所の一人暮らし女性が、買い物の問題を一緒に考えた（民生委員も同席して、情報提供）。そこで出てきた解決のアイデア2つを、自分たちで生かすだけでなく、同時に、他の当事者にも教えてあげようということになった。

一人暮らし
女性

上田さん

同じ課題を持った2人

買い物の不便をどう解決するか

- ①重い物を買っても運べないのが困る。
→Aタクシーなら店から車まで運んでくれる。
ただし〇〇さんを指名すること。
- ②循環バスは停留所が遠いから使えない。
→停留所ではない所でも、手を上げれば
停まってくれる（民生委員の情報）。

志摩さん

一人暮らし
女性

②ご近所の共通課題に取り組む

<煩雑な行政手続きの問題を当事者主導で解決してみる>

- ①一人暮らしの志摩弘子さんが、ご近所で一人暮らしの男性・足立さん（いずれも仮名）と、当事者同士で共通の困り事の解決策を一緒に考えた。「行政手続きで煩雑なものは住民1人では難しい」という問題。この地域は自衛隊があるので防音装置やエアコンを設置するのに補助金が出るが、この手続きが難しいということだ。
- ②解決策としては、まず志摩さんから「すでに申請した人に教えてもらったらどうか」という案が出て、足立さんからは「同じように困っている人やこの制度を知らない人もいるから、サロンで説明会ができないか」という提案がされた。

そこで志摩さんが実際に経験者に聞いたところ、①申請書は役所の人に教えてもらわないと難しかった、②ある電気屋にお願いすると添付書類をほとんど準備してくれるらしい、ということが分かった。

③その結果、①役場の担当者にサロンで説明会をしてもらおう。そして②エアコンをその電気屋で購入することで、添付書類を準備してもらおうということになった。これにより、2人だけでなく、同じ悩みを持つ他の当事者や、この制度を知らなかった人も助かるわけだ。

④当事者が中心になって困り事の対策を始めると、解決が早いうえに、その成果がすぐに他の当事者にも共有されていく。

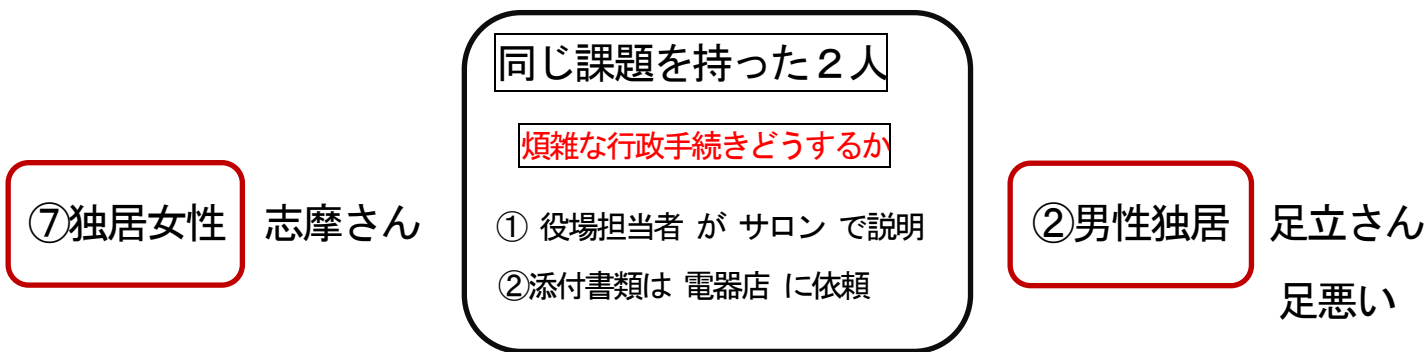
同盟は、当事者がこれを生かすことで、各自の自己救済力を合算されたと考えられる。

⑤その後、コロナでサロンでの説明会が延期になった。サポーターが「仕方がないので来月に延期しましょうか？」と言ったら、当事者である足立さんが「それは困るよ！」。

⑥そこで足立さんはどうしたか。自分で支援者を3人見つけて、無事に申請にこぎつけた。

⑦その支援者3人を、申請を希望する他の当事者にも紹介した。

⑧その後、Sさんの所には「申請の仕方がわからない」人が数名やって来て、Sさんが教えてあげることで申請できた。



(2)緩やかなご近所同盟

先程の庭木の剪定の事例では、緩やかなご近所同盟と考えることができる。

①庭木の剪定が大変という一人暮らしの女性たちがご近所にたくさんいる。

①だれかが1人の技術者（青色の★印）を見つけたことが発端で、その人に、「私も」「私も」と個別に交渉。

②最終的にはマップのように、ご近所によっては軒並みと言えるほどの交渉数になった。